

思い出を表現する共同体の生成 表現ワークショップを通して

永井由美子[†] 野島久雄^{††} 須永剛司[†]

本稿は「思い出表現」をテーマとして2006年度から継続している生涯学習講座における表現ワークショップを対象としている。この講座では思い出を表現する共同体が生成されてきているが、その過程において参加者の参加度合いの変化が見られる。そこでは表現「形式」を話し合うことで表現「内容」を共有している。

Generation of the expression community for the personal memories; by the expression workshop

Yumiko Nagai[†], Hisao Nojima^{††} and Takeshi Sunaga[†]

This paper for the expression workshop have been held about personal memories at Seijo University for open course, since 2006. In this course, generating of the expression community. At the process, participants level of commitment changing. At the process, first they discuss "container" then they shear their "contents".

1. 思い出を表現する

本稿では、思い出を表現するワークショップを対象としている。ここでは思い出工学^[1]に対して、実際に思い出を扱う人々自身が自分で表現という形を与えることで取り扱える対象とすることを目指して、表現ワークショップを行ってきている。

2. 「思い出を記録するワークショップ」講座

「思い出を記録するワークショップ」講座は成城学園の「成城学びの森」(成城大学生涯学習支援事業:有料)のプログラムの一つとして2006年春学期から始まり、現在まで断続的に継続して行っている^[2]。通常「成城学びの森」は講演形式の講義を主体とするプログラムである。2006年度から「記憶の心理学から思い出の工学まで」というタイトルで講座を開始。「家の中の情報化の中核となるコンテンツとしての思い出をどのように管理して、どのように保存するかについて検討し、そのために役立つ工学的支援の枠組みを作り出す」という「思い出工学」とは何かを紹介する講座として始まった。「思い出」という「パーソナル」なことを対象とするため、他者の事例よりも自分の思い出を手にしながらかえることで自分の問題として理解できる。そこで参加者にとって「思い出のモノ(自分の思い出が付随する持ち物)」を持参、それを写真に撮って表現する、表現ワークショップの講座を行ってきている。ここでいうワークショップとは「参加体験型グループ学習」のことを指す^[3]。

参加者に自身の思い出を持参してもらい、それらの表現形式を考えることで、思い出をどのように保存、管理するかを考え、実際に制作してきた。以下4回の講座とそこで行った表現である。

- (1) 2006年春学期: 自分の思い出カードで地図表現(図1)
- (2) 2006年秋学期: 街歩きをして冊子表現(図2)^[4]
- (3) 2007年春学期: 参加者の自分史で年表表現(図3)
- (4) 2008年秋学期: カルタやトランプで表現((図4)
- (5) 2010年2月: 表現実験((図5)^[5]



図 1 2006年春学期 地図表現制作



図 2 2006年秋学期 全員の冊子



図 3 2007年秋学期 年表表現 最終回発表



図 4 2008年秋学期 カルタ制作中間発表



図 5 2010年 表現実験

3. 参加度合いの変化：2008年春学期の実践より

本稿では、2008年春学期の事例を取り上げる。この回では PC を使いたい、という参加者の希望が増えてきていたこともあったので PC を使った表現を行った。しかし、このときまでに表現したモノを前にして思い出に関して話し合うことで、より深い議論ができていたので表現課題を参加者全員で同じにしそれぞれの表現物を見せ合いながら話し合うという形式をとることとした。そして、どうしても個人作業になってしまう PC だけで行うのではなくできるだけ PC を使うことにとどめることとした。ここでの継続参加者は 2006年秋学期から参加していた Aさん。お母さんの自費出版の和歌集を持参してきた Bさん。水彩画クラブに所属しドイツにスケッチ旅行に行ったアルバムを持参してきた Cさん。女性プロ棋士で囲碁の国際交流をしている Dさん。定年退職後にバイクで世界各地を旅行した写真をまとめた Eさんらが新たに参加、自分で表現活動をしたことのある参加者が多かったこともあり、

個人の思い出を積極的に見せ合っていた。そこでは以下のようなことが行われていた。

3.1 参加者と主催者のやってきたこと

(1)

080926 準備

主催者の打合せ。プログラムと表現方法の検討。事務局への参加者の年齢、性別、過去の参加の確認、参加者が PC の操作がどのくらいできそうかの検討。この時点で C さんの参加がわかったので、過去の表現物の紹介依頼の検討、また同じ表現はできないため新しい表現方法の検討を行った。そこで野島が行ってきているトランプ表現を検討。これまでも写真と文字を使ったカード形式で表現してきていたので、文字を扱うカルタ表現を提案することとした。

(2)

081011 第 1 回講座

初回はテーマの共有とお互いを知り合うのが目的。主催者は記憶を記録することについての現状の講義を行い、過去の講座での表現も紹介。参加者全員の自己紹介では、何がしたくて参加してきたのかを語った。PC を使うと整理ができると考えていたり、PC に過剰な期待を抱いている参加者もいた。

(3)

081024 第 1 回講座終了後 B さんからのメール

B さんは自己紹介のときに話せなかったことを主催者にメール。B さんは両親の思い出を辿りカタチに残すための具体的なやり方を学ぶために参加。どの記録方法で残すのがいいのか悩んでいた。表現ワークショップという手法に興味を持ち、また野島の著書も読み^[6] 講座に積極的に参加しようとしていた。

(4)

081025 第 2 回講座

参加者は表現したい思い出のモノを持参、見せ合って思い出の内容について語り合った。

(5)

081105 主催者進め方検討 (メール)

これまでの講座を振り返っても、普段表現活動をしたことがない人たちにとって、個人的な内容を初対面の他人同士で語り合い、表現することには抵抗感を持つ者が多い。そのため、毎回参加者の方向性を確認しつつ、発表の仕方と、作り方について検討していった。この秋学期の参加者は、実際に PC を持っており、PC を使う

とうまく整理ができるのに自分はそのやり方を知らない、と考えている人たちのようであった。そこで、データベースとして管理することと、表現物にすること、表現したものを使うこと、に関して、話し合いながら、PC を使ってカルタをつくることにした。またカルタがイメージできるように写真をカードサイズにプリントアウトすることを検討。カードプリンタを準備することとした。また表現物がイメージできるように様々なカルタやトランプを用意することとした。

(6)

081108 第 3 回講座

表現様式を共有するため、50音で文字札を読み上げ絵札を取る「子供向けキャラクターカルタ」「いろはがるた」、文字札を取る「百人一首」、野島が実践している「思い出トランプ」を提示した(図 6)。



図 6 参考表現 いろはがるた キャラクターカルタ、トランプ

ここで、実は中国にはカルタに該当するカードゲームがないとのことで中国籍の D さんには遊び方がどうしてもイメージできなかった。そこで表現したいことが 4 つ程あったのでトランプのスイートに当てはめることにした。E さんは実家からアルバムやスライドを大量に持参、百人一首は和歌なので、百人一首の形式のカルタにすることにし、和歌の内容と合致する写真を組み合わせることにした。水彩画が趣味の C さんは今までのものはすでに製本済みなので新たに自宅近辺の思い出をまとめようと考え、豪徳寺近辺の写真を撮ってきていた。

各自が持ち寄った内容に合った形式を選び、最後に全員に向けて発表した。

(7)

081115 主催者カード準備

カードの内容がそろってきたので紙面上における文字の位置を合わせるためにアドビ社の「イラストレーター」でフォーマットを作成した。

(8)

081115 第4回講座

各自、カードにする写真の選択が終了。文字カードの句もほぼ完成、それぞれ再昨作業にはいる。自宅で「ワード」を使って作業してきている参加者がほとんどだったが、とりあえず用意したフォーマットに文字を入れ、カードにプリントしてできあがりイメージを確認した。最後に全員でカードを手に見した。

(9)

081128 主催者カード準備

参加者はイラストレーターを持っていない。しかし全員ワードで作業はできる。そこで jpg にするのは手間がかかるが、参加者が自宅で作業しやすいことを優先してワードでフォーマットを作り直した。

(10)

081129 第5回講座

制作継続。中間発表を行う。Bさんは制作したカルタで正月に家族で遊ぶことを目標に和歌集から100枚を選び、罰ゲームは和歌集の暗記を想定。Cさんは最終的に「世田谷名所めぐりカルタ」を10枚作成。スケッチでなくとも写真を撮るだけでも対象を調べることで、最終的には次のスケッチの集まりのグループ展に作品として出すことを検討していた。

(11)

081209 印刷作業

講座中には印刷作業が終わらないため、預かったデータの印刷作業を行う。

(12)

081213 第6回講座 最終回

全員で発表を行った(図7)。



図7 最終回発表

(13) 090119 Bさんからお礼状(メール)

Bさんはまだ全部印刷が終わっておらず、まだ継続して作りたいとのメールが来た。講座を通して、記録を残すだけでなく、作品として形になる面白さがあるとしていた。そして持ち歩けること、広げられることを評価。作品にするために選択する作業が高度な作業だったこと、他の参加者の作品から触発されたことも指摘。

(14) 090425 Bさん母を偲ぶ会でカルタを披露

お母さんの一周忌だったBさん、和歌教室の生徒達が「先生を偲ぶ会」を開催、そこに招待されたBさんはカルタを披露。生徒の1人にカードを持って行かれてしまった。

(15) 090514 Bさん一周忌で親族にカルタを披露

続けて、一周忌には親族にもカルタを披露することにしたBさん。最後までプリントアウトできていなかったこと、また持って行かれてしまうことを想定、カードの増刷を行った(図8)。一周忌では戦争中の写真に書かれた文字を見てどんな気持ちで書いたのか、誰が読むために書いたのか、といったことにまで話題が広がった。そして「死蔵した写真を掘り起こして言葉をつけ作品にすることをすごくおもしろい」として全部できあがったらまた見せることにしている。



図 8 Bさんカルタ表現

4. 参加度合いの変化

参加者には、1 表現形式を共有し、それを 2 表現として検討、3 他の参加者と対話、そして 4 作品として表現し、最後に 5 他者との関わり（使い方、見せ方）を考える、という 5 段階の参加度合いの変化が見られた。

4.1

作り方の共有：表現「形式」の共有

2 回目の時に「カルタ」という表現形式の提案を主催者側から行ったが、これに対して、「カルタに賛成」という発言があった。ここから表現形式に関する対話が始まった。全員で同じ表現「形式」にすると、お互いの「内容」を具体的に知らなくても、文字数や文字の大きさ、配置といった「形式」に関して話し合え、その話をする事で「内容」に触れることになる。話しにくいと思っている「内容」であっても自然に話し、理解することができる。

4.2

表現として検討

3 回目では、実際に「形式」当てはめた制作を行った。「内容」がカルタという「形式」に当てはまらないために結局トランプという「形式」に変更した参加もいた。

4.3

他の参加者との対話

毎回自分がなにをどう進めたのか発表を行ったこともあり、お互いの進捗状況も理解でき、それぞれが扱う「内容」にも詳しくなった。4 回目にはお互いの作業をのぞき込みながら語り合うという光景が見られた。これは、制作を繰り返さずに最終回だけを共同制作とした 2006 年の初回の講座では見られなかった（図 9）。



図 9 作業中の対話

4.4 作品としての段階

5 回目終了後、参加者の一人から、文字の色をオレンジにしたいのだがどうしたらいいか、というメールが届いた。これまで、回数が少なかったこともあってか具体的な表現に関しての話をされることはほとんどなかったが、自分の作品として表現したくなるからこそその問い合わせだったと言える。

4.5 他者との関わり考える

カルタにすることで、実は何時、誰と、どのように遊ぶのか、という使い方を考えることになる。このことで、他者との関わりを考えることにつながり、Cさんのように自分の水彩クラブのグループ展に出展したり、Bさんのように和歌教室の生徒へ披露する、ということにつながっていた。なお、Bさんは、2010 年 2 月の実験の際には「同窓会で表現ワークショップをやりたい」という発言もしており、次には自分が主催者となって活動することも考え始めている。

5. 表現における「内容」と「形式」の関係

ここでの表現は、「内容」と「形式」の二つで成り立っていた。はじめは主催者が提示したカタチとしての表現「形式」であった。そこへ、自分が扱いたいこと、旅行に行った時の写真や文章が表現「内容」として載せられる。その「内容」によっては、カルタにできなくてトランプにしたり（6）Dさん）カルタでも百人一首にしてみたり（6）Bさん）と、それぞれの扱う「内容」に応じて「形式」を決めていった。そして、決めた「形式」に合った写真や句を選ぶという「内容」を「形式」に当てはめていく作業を行った。このように「内容」と「形式」是不可分の関係にある。

6. 「形式」を扱うことで「内容」を共有

知らない人たちと個人的な「思い出」という「内容」を話すことは大変抵抗感がある。個人的な「内容」を他の参加者と共有したくなくて、2006年春学期では表現ワークショップに違和感を感じて初回だけでやめた参加者もいた。しかし、表現の「形式」は作り方として共有しやすい。プログラムの始めに「形式」から共有することは話し合いがもちやすい。しかし表現の「内容」と「形式」は分けることはできない。結果として、具体的に自分の表現「形式」を語る時にはその「内容」を詳細に語ることになる。「内容」も一緒に語ることで、初めてその「形式」が「内容」に対して適切なものかどうか分かる。そこでは、パーソナルな「内容」ではあるが対象物としてとして取り扱うことができる。このように「形式」を話し合うことが、参加者同士の間でお互いの「内容」についての対話が生まれ、お互いの「内容」を共有できる。そのことで連帯感が生まれて継続して思い出表現を行うグループができてきている。

参考文献

- 1)
野島久雄，原田悦子「<家の中>を認知科学する」新曜社，(2004).
- 2)
中野民雄「ワークショップ」岩波新書，（2001）.
- 3)
永井由美子，野島久雄，須永剛司「参加者全員でつくる表現活動の共同体—思い出ワークショップを事例として」日本デザイン学特集号，（2001），in press.
- 4)
成城の森「思い出を語る」2006年秋学期ウェブサイト<
<http://www.nozy.org/manabi/popup/index.html>>2010年8月25日取得
- 5)
Y. Nagai, H. Nojima, T. Sunaga, Changing personal memories to group memories; study of a workshop on the expression of personal memories, The first International Conference on Design Creativity (ICDC2010), (2010), in press.